

保育者養成課程学生の資質に関する一考察
—領域「健康」に着目して—

川 畑 和 也

A Study on Qualities of Childcare Person Training
Course Students
: — Focus on the Area 'Health' —

Kazuya Kawabata

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

保育者養成課程学生の資質に関する一考察

—領域「健康」に着目して—

A Study on Qualities of Childcare Person Training Course Students: — Focus on the Area 'Health' —

川畑 和也

Kazuya Kawabata

緒言

2017年に保育所保育指針や幼稚園教育要領などの改定が行われ、それに伴い領域「健康」の改定も行われた。主な改定の内容としては、幼児期運動指針の策定を受け、多様な動きの経験をすることや食育、安全に関する明記がなされた。さらに、子どもたちの健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作りだす力を養うことを目指し、生きる力としての心身の健康や幼児期の終わりまでに育って欲しい姿の健康な心と体などとも密接に関連したものになっている。

実際に現場で働く保育者は子どもと生活を共にし、多くの時間を過ごし、子どもたちはその関わりを基盤とし、社会的習慣や態度、生活習慣など多くのことを学び成長していく。しかし遊びの三間などの問題は、家庭や地域のなかで自然に学ぶことを難しくし、結果として滞育症候群¹⁾などの子どもの健康や運動、体力などに関する問題に繋がっている。そのような中で、近年は、保育者の需要が高まり、身体的・精神的・社会的な健康や体力を持つ質の高い保育者が求められ、幼児期の子どもに最も身近な人的環境である保育者の役割や責任は拡大している現状がある。

これまでの保育者と子どもの関係性に関する研究では、両者の関係性から、担任が運動に対し得意意識を持っているクラスの子どもの運動能力が、苦手意識のある担任より有意に高く²⁾、保育者の人的環境としての重要性が報告されるなど多くの研究がなされている。また、保育者の資質に関する研究では、西山（2009）は、子どもの人とのかかわる力の育ちに望ましい変化を与えることのできる保育者の現実可能性の認知を肯定的な方向に変えることを目指したプログラムを開発し、プログラムが「人間関係」に関わる保育者効力感の向上に効果的であったことや保育者に要請されている資質や専門性の向上に有効であったことを報告している³⁾。

これらのように、広く保育者の資質や技能に関して検討したものや、領域別に検討したものがあるが、領域「健康」に着目し、子どもたちの心身の健康を育む保育者の資質について検討したものは多

くない。

そこで本研究では、子どもの心身の健康を育む保育者の資質に関して、領域「健康」に着目し検討を行う。その際、健康な子どもを育む保育者の保育行為に対する信念や実現の見通しについて健康保育者効力感を用いて測定する。さらに、健康保育者効力感に影響を及ぼす要因を、保育者自身に関わる生活状況や運動状況から検討し、保育者養成課程学生が現場で働く際に必要な資質獲得の一助とすること目的とする。

方法

調査対象及び調査時期

調査対象は、K県下の保育機関（2園）で勤務する保育者62名、及びK県下の認定保育者養成校に通う学生64名であった。調査は2019年7月に、保育者には各園の園長に調査協力を依頼し配布・回収を行い、学生には筆者が講義終了後に配布・回収を行った。倫理的配慮として、研究の目的や得られたデータは研究以外に使用されることはないこと、無記名であり回答者は特定されないこと、アンケートの提出は自由であることを調査依頼書に明記し、更に口頭でも説明を行った。

調査内容

1.基本属性

基本属性として、性別、保育歴、年齢の回答を求めた。保育者と学生に同様なアンケート調査を行なったが、保育歴に関しては保育者にのみ回答を求めた。保育歴には、これまでの保育現場での仕事の経験年数の記述を求めた。

2.生活状況と運動状況

現在の生活状況に関しては、田辺（2009）が作成した現在の生活習慣や生活リズム、疲労感などの健康に関わる生活状況に関する質問項目⁴⁾を使用した。各質問項目に関しては、「非常にそう思う」～「全くそう思わない」までの7段階（7～1点）での回答を求めた。

また、運動状況に関しては、運動嗜好や運動への関わりに関する質問項目を加えた。各項目に関しては、「そう思う」～「そう思わない」の4段階（4～1点）での回答を求めた。

3.健康保育者効力感

健康についての保育者効力感に関しては、田辺（2009）が作成した「健康」保育者効力感⁵⁾を用いた。この尺度は幼稚園教育要領などの領域「健康」における10の内容を上位概念として、それぞれの内容ごとに2～3の項目文を当てはめ、作成されたものである。作成されたものは、保育

現場での保育行為として適否を判断するために、保育園園長 1 名に依頼し内容の吟味が行われている。尺度は全 14 項目からなり、各質問項目について、保育者として（学生の場合は保育者になったと想定して）どのくらい取り組める自信が持てますかとの教示文に基づき、「非常に自信がある」～「全く自信がない」までの 7 段階（7 点～1 点）での回答を求めた。

統計処理

対象者に対して行なった基本属性や生活状況、運動状況に関する質問項目については単純集計を行った。また保育者効力感については、学生と保育者間での比較、生活状況、運動状況の違いによる比較などを行い、それぞれの対応のない t 検定を行った。さらに、保育経験年数による比較では、一元配置分散分析を行なった。なお、統計処理については、シミック社製 HALBAU (High quality Analysis Libraries for Business and Academic Users) 7 を使用し、全ての統計的検定において 5% 未満を有意水準とし、10% 未満を有意傾向とした。

結果と考察

回収率

回収率は、質問箇所所未記入箇所のあるものや重複回答があるものを除いた、70.6% (89 名) であり、それぞれ保育者 67.8% (42 名)、学生 87.5% (56 名) であった。

生活状況と運動状況

学生と保育者の生活状況と運動状況の平均得点と標準偏差を示す (表 1)。平均値の差の比較を行ったところ、生活状況において保育者と比較し学生の得点が有意に低かったが (生活状況: $t=5.71, p<.001$)、運動状況においては有意な得点の違いは示されなかった (運動状況: $t=0.42, n.s.$)。つまり、運動状況などに関しては両者に大きな違いはないが、学生は現場で働く保育者と比較し、生活習慣に気を遣った生活をしていない状況が示唆された。大学一年次生を対象とした生活習慣等のアンケート調査では⁶⁾、約 1 割が「あまり健康でない」と回答し、男子学生の 3 割程度、女子学生の 4 割程度が体力に不安を持っていることや、朝食の有無において、男子学生の 2 人に 1 人、女子学生の 3 人に 1 人の学生が欠食をしているという深刻な状況を示している。学生の自由度は家庭や学校による管理離れによって高まるが、生活習慣や健康習慣に対する問題は深刻化している。これらのことから、生活習慣などの日常生活が乱れやすいこの時期の学生が、子どもの健康に直接関わる保育者としてのあり方を理解し、早期に生活状況や運動状況を見直し、改善することのできる支援を行う必要がある。

表 1 学生と保育者の生活状況と運動状況の比較

	学生 M	n=56 SD	保育者 M	n=42 SD	t値	p値
生活状況	43.07	9.72	52.19	6.03	5.71	***
運動状況	12.77	4.73	13.19	5.04	0.42	

***: $p < .001$

健康保育者効力感

学生と保育者の健康保育者効力感得点の平均得点と標準偏差を示す(表 2)。平均値の差の比較を行ったところ、健康保育者効力感の合計得点、下位項目のほとんどの項目において有意な得点の違いは示されなかったが、「楽しんで取り組む」の項目で保育者の得点が有意に高く、「食育」の項目で保育者が有意に高い得点の傾向を示した(健康保育者効力感: $t=0.88, n.s.$ 、安定感: $t=0.22, n.s.$ 、身体活動: $t=0.55, n.s.$ 、戸外遊び: $t=0.50, n.s.$ 、楽しんで取り組む: $t=2.68, p<.01$ 、食育: $t=1.76, p<.1$ 、生活リズム: $t=1.54, n.s.$ 、清潔: $t=0.47, n.s.$ 、見通し: $t=0.37, n.s.$ 、病気予防: $t=0.67, n.s.$ 、安全: $t=0.09, n.s.$)。

表 2 学生と保育者の健康保育者効力感の比較

	学生 M	n=56 SD	保育者 M	n=42 SD	t値	p値
健康保育者効力感	73.04	10.55	74.76	8.83	0.88	
安定感	5.52	1.09	5.47	0.80	0.22	
身体活動	10.11	2.20	10.31	1.44	0.55	
戸外遊び	5.41	1.21	5.31	0.78	0.50	
楽しんで取り組む	4.91	0.93	5.38	0.80	2.68	**
食育	5.02	1.13	5.38	0.91	1.76	†
生活リズム	9.91	1.78	10.43	1.53	1.54	
清潔	10.45	1.79	10.60	1.33	0.47	
見通し	5.27	0.90	5.33	0.85	0.37	
病気予防	5.54	1.10	5.67	0.82	0.67	
安全	10.91	1.88	10.88	1.44	0.09	

*: $p < .01$, †: $p < .1$

つまり、学生は実習などを通じた現場経験において、実習をやり抜くことに精一杯で、楽しんで取り組むということまで達していないこともその一つの要因として考えられる。また、学生と保育者間では、保育者の方が健康保育者効力感得点は高い値を示し、下位項目においても、多くの項目で保育者が高い値を示した。これらのことから、健康保育者効力感は、現場での経験を通して、より獲得していくものであることが推察される。

保育経験年数による生活状況と運動状況

一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会の報告(2014)において、幼稚園教諭、保育士の専門性、資質に関して養成校の段階と現場での段階で分け、どの段階で獲得されることが期待されて

いるのがまとめられている。そのため、調査協力をいただいた 42 名の保育者を保育歴によって分類し、学生、保育経験 5 年未満の保育者、保育経験 5 年以上の保育者の 3 つの群に分け検討を行った。

それぞれの群における生活状況と運動状況の平均得点と標準偏差を示す（表 3）。一元配置分散分析による平均値の比較を行ったところ、「運動状況」においては有意な得点の違いは示されなかったが、「生活状況」の項目において有意な得点の違いが示された（生活状況： $F=15.20, p<.001$ 、運動状況： $F=0.41, n.s.$ ）また生活状況の多重比較を行ったところ、学生と比較し、保育経験 5 年以上の保育者（ $t=4.31, p<.01$ ）、保育経験 5 年以上の保育者（ $t=4.376, p<.01$ ）の得点は有意に高い得点を示した。

表 3 保育経験年数による生活状況と運動状況の比較

	学生 M	n=56 SD	5年以下 M	n=11 SD	5年以上 M	n=31 SD	F値	p値	多重比較		
									A-B	A-C	B-C
生活状況	43.07	9.64	54.91	7.04	51.23	5.20	15.20	***	**	**	
運動状況	12.77	4.69	12.18	5.57	13.55	4.70	0.41				

***: $p<.001$, **: $p<.01$, *: $p<.05$

保育経験年数による健康保育者効力感の比較

それぞれの群における健康保育者効力感の平均得点と標準偏差を示す（表 4）。一元配置分散分析による平均値の比較を行ったところ、「健康保育者効力感」においては有意な得点の違いは示されなかったが、下位項目の「進んで取り組む」の項目においてのみ有意な得点の違いが示された（健康保育者効力感： $t=0.26, n.s.$ 、安定感： $t=0.57, n.s.$ 、身体活動： $t=0.03, n.s.$ 、戸外遊び： $t=0.87, n.s.$ 、楽しんで取り組む： $t=1.60, p<.01$ 、食育： $t=1.06, n.s.$ 、生活リズム： $t=0.77, n.s.$ 、清潔： $t=0.18, n.s.$ 、見通し： $t=0.12, n.s.$ 、病気予防： $t=0.70, n.s.$ 、安全： $t=0.09, n.s.$ ）また有意な得点の違いが示された「進んで取り組む」の項目の多重比較を行ったところ、学生と保育経験 5 年以上の保育者において、保育経験 5 年以上の保育者の得点が有意に高い得点を示した（ $t=3.10, p<.01$ ）。

表 4 保育経験年数による健康保育者有効感の比較

	学生 M	n=57 SD	5年未満 M	n=11 SD	5年以上 M	n=31 SD	F値	p値	多重比較		
									A-B	A-C	B-C
健康保育者効力感	73.04	10.55	72.91	8.24	75.42	8.92	0.62				
安定感	5.52	1.09	5.36	0.77	5.52	0.75	2.13				
身体活動	10.11	2.20	10.36	1.23	10.29	1.49	0.14				
戸外遊び	5.41	1.21	5.18	0.72	5.36	0.79	0.22				
楽しんで取り組む	4.91	0.93	5.00	0.95	5.52	0.67	4.91	**		**	
食育	5.02	1.13	5.09	0.79	5.48	0.91	2.03				
生活リズム	9.91	1.78	9.91	1.24	10.62	1.56	1.85				
清潔	10.45	1.79	10.36	1.07	10.68	1.38	0.25				
見通し	5.27	0.90	5.27	0.75	5.36	0.86	0.10				
病気予防	5.54	1.10	5.82	0.94	5.61	0.75	0.38				
安全	10.91	1.88	10.55	1.56	11.00	1.34	0.29				

*: $p<.01$

今回「健康」保育者効力感においてほぼ全ての項目で有意な得点の違いは示されなかったが、保育経験 5 年以下、学生、保育経験 5 年以上の順で得点は高くなっており、養成期に比較的高く、初任期に低くなり、保育経験を積むことで再び向上することは、先行研究と同様の結果を示した⁷⁾。学生においては、現場での活動経験は少なく、実習での数週間の経験が保育現場の理解する機会となっている。そのような短期間の実習を過ごす中である程度の効力感が高まるが、実際に現場で働き出した時に、保育現場の過酷な現実を体感し、保育者としての自身の在り方に自信を持てなくなること、初任期に低下することが考えられる。しかし、保育経験 5 年以上の保育者において再び効力感が向上することは、現場での経験を通して保育者としての資質の向上や保育技術の向上、保育者としての慣れが影響していると推察される。本学においては幼保連携型こども園を併設しているが、保育現場を見学する程度に留まっている現状である。子どもたちとの関わり方や保育技術の向上だけではなく、保育現場の過酷な現状やそこで求められている資質について、実体験を通して学び、実際の現場に繋げていくことができるような環境を構成していくことも重要である。

表 5 健康保育者効力感と現在の生活状況との関連

	学生	保育経験 5年未満	保育経験 5年以上
N	57	11	31
生活状況	0.10	0.38	0.53 **
運動状況	0.26 *	-0.35	-0.09

* *: $p < .01$, * : $p < .05$

その後、各群において「健康保育者効力感」と「生活状況」、「運動状況」との関連を把握するために、ピアソンの積率相関相分析を行った(表 5)。その結果、学生においては、「生活状況」では相関関係は認められなかったが、「運動状況」では相関が認められた(生活状況: $r=0.10, n.s.$ 、運動状況: $r=0.26, p<.05$)。また、保育経験 5 年以上の保育者においては、「生活状況」で相関が認められ、「運動状況」では、弱い相関傾向が認められた(生活状況: $r=0.53, p<.01$ 、運動状況: $r=-0.09, n.s.$)。しかし、保育経験 5 年未満の保育者においては、いずれの項目においても相関関係は認められなかった(生活状況: $r=0.38, n.s.$ 、運動状況: $r=-0.35, n.s.$)。つまり、学生においては、現在の運動状況などが影響し、健康保育者効力感が高まること、また 5 年以上の保育者は、現在の生活状況が良好であるほど健康保育者効力感が高まることが示唆された。

学生や保育経験が 5 年未満の保育者においては、子どもへの心身の健康の育みに対し、現場経験や保育行為に対する知識や実践力の少なさから、試行錯誤しながら行っている様子が伺える。一方 5 年以上の保育者においては、自身の生活や運動、健康状況などと関連付けながら、子ども達の健やかな健康を育む保育実践ができていることが考えられる。保育者を目指す学生は、子ども達が積極的に身体活動を行うために活動的であることが望まれる一方、学生の体力や生活習慣は低下し、それらは将

来における保育者としての重要な資質を欠落する一因になることが報告されていることから⁸⁾、自身の生活や運動、健康に関しても良好に保つことで、子どもの健康に配慮できる保育者を目指す必要がある。これらのことから、自身の健康を良好に保ちながら子どもの心身の健康を育むことのできる保育者の養成の必要性が明らかとなった。石川ら（2018）は保育施設が学生に求めるものは、技術・技能よりも資質であり、養成校においても即戦力の保育者養成ではなく、終生自身の資質や技術・技能を伸ばすことを主眼とした教育課程の構築が必要であることと述べている⁹⁾。子どもたちの健康に直接関わる保育者として、自身の生活や運動習慣、健康が子どもの心身の健康を育むことにつながる可能性があることから、養成校においても長期での保育者養成を目指し、学生の資質向上に向けた働きかけを行う必要性がある。

結論

本研究の目的は、子どもの心身の健康を育む保育者の資質の向上について、領域「健康」から検討し、その示唆を得ることであった。K 県下の保育機関に勤める保育者 62 名と同県の認定保育者養成校に通う学生 64 名に対して、健康保育者効力感と生活状況、運動状況に関するアンケートを用いて調査を行なった。

その結果、学生と保育者間には健康保育者効力感に有意な差は認められなかったが、保育歴別に検討すると保育経験年数によって違いが生じていた。保育経験と共に保育技術は獲得されていくが、健康保育者有効感、現場に出た直後の初任期で低下することが示され、養成校においては現場に出るまでの短い期間の中で、保育者として実体験を通して学び、実際の現場に繋がる資質を養う働きかけを行うことが重要である。

また、健康保育者効力感と生活状況、運動状況との関連から、学生は運動状況が影響し健康保育者効力感を向上させ、経験の長い保育者は、自身の日常生活が影響し向上させていることが考えられ、学生自身も早い時期から自身の生活や運動、健康状況と子どもたちの健康を関連付けて理解することが望まれる。

以上の結論から、子どもの心身の健康を育む保育者の資質に関する一側面が見出された。保育者を目指す学生は 2 年という短い期間の中で資格を取得し、現場に出ていかなければならない。そのような中で、実際に現場での保育実践は理想と現実のギャップに困惑する保育者も多いだろう。保育者養成校においては、保育現場の現状を知る機会を提供することや、子どもたちの健康に直接関わる保育者が、より自身の生活や運動を見直して、適切な指導・支援を行うことができるようその資質の向上を促す働きかけを行う必要がある。

引用文献

- 1) 倉真智子.(2014).子どもの運動遊び:遊びと運動.勝木洋子(編),*保育者をめざすあなたへ子どもと健康*(pp120-121).株式会社みらい
- 2) 森 司朗・杉原 隆・吉田伊津美・近藤充夫.(2004).園環境が幼児の運動能力発達に与える影響.*体育の科学*,**54**,329-336
- 3) 西山 修.(2009).*保育者の効力感と自我同一性の形成・領域「人間関係」について*.風間書房
- 4) 田辺昌吾.(2011).心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について・「健康」保育者効力感からの検討・*四天王寺大学紀要*,**51**,173-185
- 5) 4)と同様
- 6) 檜垣靖樹.(2017).からだを動かそう:なぜフィットネス?.福岡大学スポーツ科学部(編),*大学生のスポーツと健康生活*(pp8-9).大修館書店.
- 7) 4)と同様
- 8) 小川幸代・西島大祐・高橋宗良(2017).保育者をめざす女子短期大学部生の体力と生活習慣に関する調査研究.*鎌倉女子大学紀要*,**24**,61-69
- 9) 石川拓治・長澤 貴(2018).保育士・幼稚園教諭実習生に求められる資質および技能についての一考察.*鈴鹿大学短期大学紀要*,**1**,249-272

参考文献

- 一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会.(2014)『保育者の専門性についての調査』-養成課程から現場へとつながる保育者の専門性のプロセスと専門性向上のための取り組み-第2報. http://www.hoyokyo.or.jp/profilr/senmon/seminarreport_26.pdf (2019.8.6 アクセス)
- 厚生労働省.(2018).保育所保育指針.<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf>(2019.8.1 アクセス)
- 内閣府.(2014).幼保連携型認定こども園教育・保育要領.<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/seisyourei/h260430/c1-2-honbun.pdf>(2019.8.4 アクセス)
- 文部科学省.(2018).幼稚園教育要領. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf(2019. 8.1 アクセス)
- 文部科学省.(2012).幼児期運動指針.http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm(2019.8.1 アクセス)